遷移を比較してみると、7月を轉換期として、その前後の相似た2型の蠅族相に分れることが極めて鮮明になる。つまりこれを象徴種で示せば *Fannia* 型、*Musca* 型の2型である。又この場所の蠅族相を一つの群集と看做すとき、各種の個體数の間には何等かの法則性があるかどうか、換言すれば各種はただ單なる偶然の雜居者であるかどうかは頗る興味のあることである。このような群集内の各種の個體数の間には各種を律する法則性があるということに注目したのは元村氏('32)であるが、氏によれば各種は個體数の順位にしたがつて等比級数をなすという。筆者は元村氏法にしたがつてこの關係を作圖してみた。圖は夫々各座標が直線的に配列してこの場合もこのような一種の平衡關係が成立することがうかがわれた。しかしこの平衡關係は季節の推移に伴つて變化する一種の動的な平衡狀態であることを示した。(詳細は資源科學研究所彙報第15號に發表の豫定) [資源科學研究所]

[問] 仙合地方における最高氣温は何月のどの時期か、最高氣温と蠅相の發生出現率との關係如何。また發生出現最高率を示す時期は種によつて特異性が見られるか。京都地方では七月下旬—八月上旬頃の最高温度の時期に蠅の出現率が顯著に低下することを知る。(箕浦忠愛)

[答] 仙臺では最高氣温は7月下旬から8月上旬の頃で、蠅族の個體数の減少の夏季の谷はこの場合8,9月の交に見られた。これはつまり高温の影響が幾分時日を経て現われたもの所謂「遅れ」であると思われる。また種類によつて夫々出現の時期、極盛期、終熄期等の消長型は特有な型を示した。

蚊 蛹 における 2・3 の 構 造 につ い て

淺 沼 靖

Asanuma, K. On some morphological characters in mosquito pupa

蚊の形態又は分類にかんする研究は、成蟲、幼蟲の兩期において著しい發展を見せているが蛹期については、特殊な種例えば *Anophelini* の1部を除いては、余り知見の進歩はないようである。

演者は、この點に留意し、Baisas (1936, 1938 など), Barraud (1935), Christophers (1933), Crawford (1938), Edwards (1932), Evans (1938), Ingram et Macfie (1917), Macfie (1920), Nuttall et Shipley (1901), Senevet (1930) らの業績を参照しながら、先ず族 (Tribe), 屬, 亞屬を單位とする研究を邦産蚊類について行つていく。

その結果、從來顧りみられることの少かつた第8腹節突起: Postero-median projection of the 8th abdominal tergum (淺沼: 1946), 頭頂板: Vertical plate (淺沼: 1946), 小顎肢長の雌雄比: Ratio of length of maxillary palpi between male and female, および呼吸角の横線狀構造: Transverse striations of trumpet (Theodor: 1923) などに形態・分類學上、注目に値する特徴の存することを見出した。こゝでは先に發表した

(浅沼: 1946) 第8腹節突起及び頭頂板につき、新観察種での結果を加えて述べておく。

第8腹節突起 本構造は、Anophelini と Culicini の2族を単位として明らかな2型を示す。前者は幅広い矩形状、後縁は後方へ凸出することはないが、後者では、半圓形、半紡錘形又は半橢圓形で、後縁は必ず後方へ隆起している。Culicini のなかでも、後縁の湾曲度や側縁の発達程度によつて、*Aedes* 型と *Culex* 型に分けられる。*Aedes* 型は、傾縁の発達が悪く、後縁は基部附近から直接湾曲を始め、又その湾曲度もやゝ強いもので、*Aedes*, *Uranotaenia*, *Armigeres*, *Tripteroides* がこれに含まれ、*Culex* 型は側縁が顯著で、後縁の湾曲も弱いものである。これには、*Culex*, *Theobaldia* が属する。

頭頂板 Anphelini と Culicini で相違する。前者は、ほぼ單一構造と認められ(点状斑などは別として)、一様な厚みをもつた小體板であるが、後者では、両側縁部のキチン化は、中心部に比し著しく進み、ために兩部が判然と區別できるのである。演者は、このキチン化強く板状をなした部分を頭頂板側板(Lateral sclerites of vertical plate)と呼ぶ。たゞし自然位置では、中心部はタテジワをなして側板に細くはさまれている形になっている。

即ち頭頂板にかんしての兩族の差は、Anophelini が單一構造を示すに反し、Culicini では、薄い膜状の中心部とキチン化の強い左右側板をもつことに求められる。

なお、蛹の頭頂板観察を行へた属名は、*Anopheles*, *Culex*, *Aedes*, *Armigeres*, *Theobaldia*, *Uranotaenia*, *Tripteroides* の7属である。

[資源科學研究所]

[問] 貴下の研究によつて、蚊蛹の構造の2・3が明らかになつた事は結構ですが、種の特徴はどのようなのですか。(山口左伸)

[答] この観察は、種よりも大きな分類単位、例えば族、属などを対象としたもので、従つて種程度の特徴には觸れなかつたわけです。

イエダニの近似種 *Liponyssus sylviarum* の 日本における發見

浅沼 靖・加納六郎・林 滋 生

Asanuma, K., Kano, R., and Hayashi, S. Occurrence in
Japan of a parasitic mite, *Liponyssus sylviarum* (C. et F.)

野鳥の寄生蟲を調査中、演者らは、たまたま本年(1949年)1月、埼玉縣下で採集されたマヒワ、コカラヒワなどの體上に寄生だにの1種、*Liponyssus sylviarum* を多數發見した。本種は歐米では、野鳥類の寄生だにとして普通種と認められ、時に雞に移行して被害を與えることであるが(Bishopp, F. C., and Wood, H. F. 1928; Cameron, D. 1938), 日本及び東北アジアよりは、未だ記録がないので、ここに新分布の事實と、形態の概要を報告しておく次第である。